

『ローマ教皇伝』におけるビザンツ皇帝
——ローマ教会による支配者認識をめぐって——
Byzantine emperor in the '*Liber pontificalis*'
---- A study of the perception of Roman church over secular ruler----

真川 明美
SHINKAWA, Akemi

摘要

In 749, Pope Zachary received the envoys of Pepin, the mayor of the palace of the Frankish kingdom. They inquired of him; Was it right or not that the king of Franks had absolutely no power but nevertheless possessed the royal office? Zachary responded that he who had the power ought to be king in order to maintain public order. This gave Pepin a good excuse for ousting Merovingian legitimate successor from the throne; accordingly, he successfully became the Frankish king.

Zachary's response indicates his view of secular rulers; what he regarded the most important thing as 'the makings of sovereign.' It was the enough power that the ruler maintains the public order to control and protect their people, lands and faith.

This paper examines how his view of secular rulers was formed, analyzing and comparing with those of the authors of the *Liber pontificalis*: a book of popes' biographies, to other secular rulers in the sixth - eighth century sections.

Christianity had been decriminalized by emperors in 313, Roman Church had enjoyed the protection of the Empire, and had been loyal to emperors ever since, even if there had been some conflicts between the emperors and the popes. On one hand the authors of the *Liber pontificalis* didn't forget protocol as far as they regarded the emperors, including usurpers, as protectors of Orthodoxy, and endured their tyrannical behavior; on the other hand, if they judged them to be enemies of God, they unsparingly labeled them as heresies. The authors tell us their views of secular rulers. This examination shows that Pope Zachary's view of his secular rulers reflects those of the authors of *Liber pontificalis*.

キーワード: ローマ教皇伝 ローマ教会 ビザンツ皇帝 支配者観

Liber pontificalis, Roman church, Byzantine emperor, secular ruler

はじめに

749年、ローマ教皇ザカリアス(在位 741-752)はフランク王国の宮宰ピピン3世(宮宰 741-751, 王位 751-768)の使者をローマに迎えた。そこでピピンの使者は教皇に「権力のない者が王

位にあることは是か非か」と問うた。教皇の答えは、「社会の秩序を維持するためには、権力を持たない者よりも持つ者が王と呼ばれるのがふさわしい」というものだった⁽¹⁾。このピピンの使者と教皇の間答は、実体を伴わないメロヴィング朝の継承者を排除し、実質的な最高権力者であったピピン3世の王位への昇進を許す名目となった。

キリスト教は、313年にミラノ勅令によって公認されて以来、帝国の庇護のもと発展した。イタリア半島は5世紀末から6世紀半ばにかけて東ゴートに支配されるが、皇帝ユスティニアヌス1世(527-565)によって再び帝国に編入される。以来、ローマ教会は帝国の一構成員として仕えてきた。しかし、時を経て、ローマ教会の帝国に対する忠誠心には変化が生じていた。皇帝ユスティニアヌス2世(685-695, 705-711)はクニセクストゥム会議の決議に教皇の承認を求め拒否され、教皇逮捕命令を出すもローマやラヴェンナの軍隊に阻まれる⁽²⁾。皇帝ティベリオス2世(698-705)も同様の試みを行うが、イタリア中の軍隊に阻止される⁽³⁾。7世紀末、人心は帝国および皇帝から離れ始めていた。8世紀半ば、ローマ教会は半島の帝国領の主権を主張し、フランク王ピピンの軍事支援を得て「教会国家」を建設する。それまで教皇と皇帝は幾度となく緊張状態にあったが、それでもローマ教会は帝国の一部であり続けた。それがいま帝国離脱という道を選択した。その決断を促したのは、ローマ教皇領の住民はもとより帝国領となっていたイタリア諸地域の住民までもが教皇を最高権威と認め始めたという事実である。加えて新たな世俗権力者から軍事支援が得られるという見込みもその決断を後押しした。「軍事支援の確保」にはザカリアスの発言に依るところが大きい。彼の発言がピピンの軍事介入を引き出し、ピピンによるランゴバルドに奪われた旧ビザンツ帝国領のローマ教会への寄進を導いたからである。

ザカリアスの言葉には、ローマ教皇が世俗支配者に求めた「支配者としての資格」が映し出されている。教皇はここで支配者の出自に全く関心を払っていない。教皇の考える「支配者の資格」は、「支配者が十分な統治力を持ち、それを発揮できているかどうか」であり、それが「権力の正当性」を担保する。本稿は、このようなザカリアスの支配者観がどのように形成されたのかを『ローマ教皇伝』(*Liber Pontificalis*)⁽⁴⁾を用いて、ローマ教会あるいは教会人のビザンツ帝国、とりわけビザンツ皇帝に対する意識の変化をランゴバルド王やフランク王に付与された称号や形容詞と比較・分析することで明らかにしようとする試みである。

1. 『ローマ教皇伝』

『ローマ教皇伝』には初代ローマ司教⁽⁵⁾ペテロから教皇ステファヌス5世(885-891)まで112名の教皇の伝記が収録されている。本稿ではこのうち東ゴート王国誕生の5世紀末、フェリックス3世(483-492)からハドリアヌス1世(772-795)までを対象とする。始まりを東ゴート王国誕生とするのは、それによりローマ教会はビザンツ皇帝と東ゴート王と二人の統治者を頂く複雑な立場に置かれたからである。終わりをハドリアヌスとするのは、彼が、従来の教皇領にピピ

ンから寄進された領土を加えて「聖ペテロの遺産」(Patrimonium Sancti Petri)とし、その領域を「ローマ教皇を君主とする教会国家」としたステファヌス 2 世(752-757)の構想を強力に推進し、その後の「教会国家」の礎を築いたと考えるからである。

1.1 内容と編纂時期

『ローマ教皇伝』は、520 年代から 530 年代にかけて編まれたとされるペテロからシルウェリウス(536-537)の途中で終わっている部分(以下「本編」と表記)と、約 100 年の時をおいて編纂が再開された「続編」の二つから構成される。本編には間をおかずに作成されたとみられる二つの版が存在する(以下、先に編纂されたものを「初版」、次のものを「第 2 版」と表記)。初版は現存していないがここから作られた二つの梗概が伝えられており、それらは 530 年の教皇フェリックス 4 世(526-530)の死で終わっている。このことからルイ・デュシェーヌは初版の完成をフェリックスの死の直後とする⁽⁶⁾。これに対し、ヘルマン・ゲルトマンは 530 年代半ば、ヨハネス 2 世(533-535)以降とみる⁽⁷⁾。この意見にはロザモンド・マッキタリクが同調している⁽⁸⁾。第 2 版は初版を改訂し、フェリックス以後、シルウェリウスの途中までが記されている。そのため第 2 版の完成は 530 年代末と考えられている⁽⁹⁾。本編の作者が一次情報として記録しているのは 5 世紀末以降で、それ以前は文献資料に基づく二次情報とされる。レイモンド・デイヴィスは、シルウェリウスの記録には同時代人の目撃証言とみられる情報が含まれているとするが、マッキタリクはこの意見に懐疑的である⁽¹⁰⁾。二次情報に頼った部分には事実誤認が多く、レオ 1 世(440-461)からアナスタシウス 2 世(496-498)にかけて顕著である⁽¹¹⁾。その後、ホノリウス(625-638)の在位期間中か、その直後に「続編」の編集が始まり、教皇ごとに記録されるようになった⁽¹²⁾。この方法は 870 年頃まで続けられた⁽¹³⁾。

各記録の基本事項は、教皇の名前、出身(出生地)、父親の名前、在位期間、空位期間、在位中の世俗君主名である。ただし、世俗君主名についてはコルネリウス(251-253)、フェリックス 2 世(355-365)からシンプリキウス(468-483)までの 12 人とアガピトゥス(535-536)以降記されていない。セルギウス(687-701)の記録では、埋葬された日を示すのに皇帝名が使われている。続いて、教皇選出以前の経歴、教皇選挙の様子、政治活動、教会改革、寄付、新規導入した制度、建設・改修した建物、死亡時の状況、埋葬(地)、叙任した聖職者数などが記されている。

『ローマ教皇伝』は考古学の見地から誤った情報が含まれていると証明されており⁽¹⁴⁾、その記述を鵜呑みにするわけにはいかない。しかし、執筆者が属する聖職者階層や社会集団が共有していた統治者に対する認識をそこに見出すことは可能と考える。

1.2 執筆者

執筆者は教皇庁に勤める聖職者あるいは俗人奉仕者とするのが通説である。具体的な職種については研究者によって意見が異なる。デュシェーヌは衣装管理官としている。ただし、その

文体と記述スタイルの一貫性からパウロ 1 世(757-767)からニコラウス 1 世(858-867)までの 1 世紀間は教皇庁文書局で作成されたものとする⁽¹⁵⁾。ゲルトマンもこの説に同意している⁽¹⁶⁾。一方、トーマス・F・X・ノーブルは教皇庁文書局の首席書記とする⁽¹⁷⁾。デイヴィスは、記されている情報が教会に保存された文書に準拠しているとみられることから、こうした資料に接触可能な比較的下位(中間管理職のような)の職員(俗人を含む)、ただし記述内容の不正確さから当該事案に詳しい人物に直接接触できるほどの地位にはなく、ラテン語能力もそれほど高くない下位の書記ではないかとする⁽¹⁸⁾。ホノリウス以降の記録はほぼ同時代人の手によるものとみられる。執筆者は教皇ごとに代わることもあれば、複数人が一人を、一人が複数を書き記すこともあった⁽¹⁹⁾。また執筆者は常に教皇寄りであったわけではない。教皇が異端に寛容とみなされると批判的に記されることも少なくない。7 世紀半ばまではこうした批判的記述が散見される⁽²⁰⁾。

1.3 先行研究

『ローマ教皇伝』研究の先駆はジョバンニ・バティスタ・デ・ロッシ、ルイ・デュシェーヌ、テオドル・モムゼンである⁽²¹⁾。なかでもデュシェーヌによる 1877 年の研究と刊本は、今日まで伝わる写本の伝来過程を詳細に追い、編纂を開始した時期、執筆者、編纂に至った時代背景、編纂の目的、記載事項の信憑性など包括的なもので、後世の研究に多大な貢献をしている⁽²²⁾。直近のものとしては、マッキタリク、ゲルトマン、リディア・カーポ、クレメンス・ガントナーらの研究がある⁽²³⁾。これらの多くは特定のテーマに絞って『ローマ教皇伝』を研究対象としており、研究の先駆けとなったデュシェーヌらのものとは趣を異にする。マッキタリクは、期間を 7 世紀から 8 世紀初期に限定した上で「続編」が教皇とビザンツ帝国の政治的・宗教的関わりをどのように伝えたかを検証し、「教皇伝は教会の教義上の立場を伝える以上に教皇とローマ教会の果たした役割を広く知らしめる基本的な伝達手段」⁽²⁴⁾と定義し、中世初期の歴史叙述における教皇伝の位置づけを行い⁽²⁵⁾、教皇伝は、教皇を皇帝に並ぶ、あるいはそれ以上の存在にすることを目的として編纂されたと分析している⁽²⁶⁾。マッキタリクの『ローマ教皇伝』の研究の多くはテーマを絞ったものだが、2020 年にそれまでの研究の総括といえるものを発表している⁽²⁷⁾。ゲルトマンは、『ローマ教皇伝』の形成プロセスやその構成を検証し、デュシェーヌの編纂時期をさらに絞り込んだ⁽²⁸⁾。教皇伝の中で教皇がどのように粉飾されて描かれているかを検証したのはフィリップ・ブロードウである。彼は「教皇伝は紛争の末にその地位に就いた教皇の正統性を喧伝するメディアであった」と指摘する⁽²⁹⁾。また編纂の目的についてデュシェーヌは「教皇の正統性の主張」としている。シンマクス(498-514)がラウレンティウス(498-499, 501-506)とその地位を争い⁽³⁰⁾、東ゴート王テオドリックの裁定によって「正統教皇」と認定されたことを理由に、「教皇伝は対抗勢力を牽制し、正当化する目的で編まれた」とする⁽³¹⁾。ブロードウも「教皇の継承を正当化する物差しとして『人々に大歓迎されている』ことを示し、教皇支援の気運を教皇庁内で高めることを図ったのではないか」として同調している⁽³²⁾。

一方、「ローマ教会とビザンツ帝国の関係」は、ローマ教会、ビザンツ帝国、どちらの研究においても欠くことのできないテーマであり、今日まで膨大な数の研究がなされている⁽³³⁾。本稿と関連する個別研究として、ジョン・ホールドンの帝国が教会や信仰をどのように扱ったかを問うた論考と、アンドリュー・J・イコーノムの6世紀から8世紀半ばまでに起きたキリスト教教義をめぐる紛争にギリシャやシリアなど東方出身の教皇や修道士などが及ぼした影響を考察した研究を挙げておく⁽³⁴⁾。

上記の研究は『ローマ教皇伝』、あるいは「ローマ教会とビザンツ帝国の関係」を対象としたものであるが、本稿は、ローマ教会から見たビザンツ皇帝観、特に教会人が考える「支配者としての資格」を主題として『ローマ教皇伝』に特化した検証・分析を行った。教皇およびローマ教会人・聖職者の世俗支配者観を明らかにすることは、帝国離脱の半世紀後に自ら皇帝を創造するに至った教皇の行為を理解する助けになるであろう。なお、皇帝の自己理解を示すビザンツ皇帝の自称との関係については、今後の研究課題としたい。

2. 『ローマ教皇伝』におけるビザンツ皇帝

『ローマ教皇伝』の中でビザンツ皇帝をはじめとする世俗君主に関する言及を取り上げ、どのように記されているかを検証する。対象期間は、東ゴート王国、ビザンツ帝国とランゴバルド王国の並立、ランゴバルド王国によるビザンツ帝国領略奪、フランク王国によるランゴバルド王国併合と、イタリア半島の統治者が代わった6世紀から8世紀末までである。この期間のイタリア半島の統治者の変遷に応じて、分析・検証する。各教皇が誰(統治者)のもとでその職位にあり、彼らをどのように表現しているかを表1に示した。

2.1 東ゴート王国時代(497-555)

この時期の特徴は、各教皇が誰の治世にその職に就いたかを記した箇所にはっきりと現れる⁽³⁵⁾。それまでは皇帝と場合によって執政官の名が記されるのが常であったが、ここでは皇帝の名と並びイタリア半島の支配者の名が記されている。特に異彩を放つのはフェリックス3世の記録で、「オドアケル王からテオドリック王」となっており、皇帝の名は文中に出てくるのみである。この頃、東西教会は単性論か両性論かをめぐって断絶状態にあり、フェリックス3世は皇帝アナスタシウス1世(491-518)の和解の働きかけにも応じなかった。ローマ教会は東方教会だけでなく単性論を支持する皇帝とも疎遠になっていた⁽³⁶⁾。東ゴートのテオドリックは、493年にオドアケルを倒し、事実上の支配者となるが、皇帝アナスタシウスに王位を認められたのは497年、教皇アナスタシウス2世の時である。それにもかかわらず、すでにフェリックス、ゲラシウスの記録に「東ゴート王」と記されている。このように書かれた理由には二つの可能性が考えられる。一つは、執筆者が皇帝による承認を重視していなかった。もう一つは、執筆時には承認を得ていたため、承認された時期にはこだわらず統治者として記載した。当時のロ

ローマ教会と帝国との関係、さらにシンマクスとラウレンティウスの争いを収めたのがテオドリックであることを勘案するならば、前者の可能性が高いと思われる。シンマクスの項には「テオドリック王と皇帝アナスタシウスの治下で」⁽³⁷⁾と二人の統治者名が無形容で並べられている。しかし、この版の元とされる初版では「異端(hereticus)のテオドリックとエウテュケス派(euthicianus)⁽³⁸⁾の皇帝アナスタシウス」となっている⁽³⁹⁾。以後、ヨハネス2世まで2名の統治者名が記載されるが、初版ではホルミスダス、ヨハネス1世、フェリックス4世に統治者名はない。記事の中で言及されるだけである。ホルミスダスの記録では「異端の皇帝アナスタシウス」⁽⁴⁰⁾、ヨハネス1世では「アリウス派(arrianus)のテオドリック」、「異端の王テオドリック」⁽⁴¹⁾とあるが、第2版では冒頭に統治者が記され、無形容の「テオドリック王」とされる一方、文中では「異端」は残されたままである。518年に正統信仰のユスティヌスが帝位に就いたこともあって翌年に東西教会の分裂は解消され、教会と皇帝の関係は改善する。しかし、イタリア半島を統治していたのは依然アリウス派の東ゴートである。ローマ教会は単性論には強硬だったが、アリウス派には寛容だった。これをパトリック・エーモリは「異端におけるヒエラルキー」と評する⁽⁴²⁾。教皇フェリックス4世はテオドリックによる選出である⁽⁴³⁾。次のボニファティウス2世は、次期教皇も親東ゴートであることを望んだフェリックスから指名され、正規の教皇選出手順を踏んでいない。これが一部聖職者の反発を買い、対立教皇ディオスコルスが立てられる。しかし、ディオスコルスは擁立から22日後に急逝し、ボニファティウスが単独教皇として残った。その彼の記録に「異端の王アタラリックと皇帝ユスティヌス」⁽⁴⁴⁾と東ゴート王に「異端」が付されている。東ゴートはアリウス派なのでそのとおりであるが、東ゴート王に必ず「異端」や「アリウス派」が付されるという規則性は認められない。一人の教皇の記録の中でも同様である。これは教会内でアリウス派に対し意見が割れていたこと、また表記が執筆者の裁量に委ねられていたことを示している。ボニファティウスの死後、教皇選出をめぐる陰謀と不正が繰り返される。これを収めたのがアタラリックで、その結果選出されたのがヨハネス2世である⁽⁴⁵⁾。

アガピトゥス(535-536)から統治者記載がなくなる。原因はビザンツ帝国と東ゴート王国の戦争激化が考えられるが、教皇はアリウス派を厭忌しており、これを弾圧する皇帝を歓迎していた⁽⁴⁶⁾。しかし、一方で単性論支持の皇帝批判も行っている⁽⁴⁷⁾。こうしたことも、統治者名不在の一因と考えられる。彼の記録には「主なる(dominus)皇帝」、「最高司令官にして主なる皇帝」、「いとも敬虔なる(piissimus)第一人者にして(princeps)最高司令官、そして主なる皇帝」⁽⁴⁸⁾など皇帝を表す言葉がいくつも重ねられている。皇帝を「第一人者」で表したのは教皇レオ1世(440-461)の「第一人者マルキアヌス」(princeps Marcianus)以来である。また「最高司令官」を採用し、「皇帝」に「最高司令官」を重ね(imperator Marcianus Augustus)、称号に形容詞を配した(piissimus Augustus Marcianus)のもレオ1世からである⁽⁴⁹⁾。それ以前は名前のみか、名前と皇帝だけである⁽⁵⁰⁾。「いとも敬虔なる」という形容詞が付加されたのは、このとき皇帝が教義上のことで教皇

に譲歩したのが理由とみられる⁽⁵¹⁾。また記録には東ゴート王と女王⁽⁵²⁾が登場するが、彼らに「異端」の文言はない⁽⁵³⁾。次のシルウェリウスは、東ゴート王テオダトゥス(534-536)の判断によってその地位に就く。王の指名を金で買ったとされる。執筆者がこれを不快に思っていることは、王の名に「暴君(tyrannus)」を付け、その死を「神の思し召しで世を去った」⁽⁵⁴⁾としていることにかがえる。皇帝に対してはアガピトゥスのそれに準じている⁽⁵⁵⁾。「主」は臣下が君主に対し用いる呼称で皇帝に限定されるものではない。しかし、ディオクレティアヌス(284-305)の治世に、人々が公的な場面で彼に話しかける際に、まず「主」と呼びかけねばならなくなって以来、皇帝を指す言葉として定着した⁽⁵⁶⁾。

2.2 ビザンツ帝国のイタリア半島再征服後(555-)

ヨハネス3世(561-574)の記録には「いとも敬虔なる第一人者」が登場する⁽⁵⁷⁾。次のベネディクトゥスでも類似の表現がみられる⁽⁵⁸⁾。在位14年に及ぶ教皇グレゴリウス1世の記録に皇帝は出てこない。彼はマウリキウスとフォーカスの二人の皇帝のもとでその地位にあったが、前者とは緊張関係にあった。それゆえグレゴリウスは、マウリキウスが帝位を追われたことを歓迎し、篡奪者フォーカスに祝福の手紙を書いている⁽⁵⁹⁾。ボニファティウス3世は、「第一人者フォーカス(602-610)から聖ペテロの教会(ローマ教会)が全ての教会の頭である」との承認を得る⁽⁶⁰⁾。ボニファティウス5世の記録では篡奪者ヘラクレイオスを「いとも敬虔なる第一人者」⁽⁶¹⁾、ホノリウスの記録でも「いとも敬虔なる最高司令官」⁽⁶²⁾としている。マルティヌス(649-653)は教義をめぐる対立から皇帝コンスタンス2世に教皇として承認されなかったのみならず、存命のまま次期教皇を選出されるという屈辱を受けている⁽⁶³⁾。それにもかかわらず、彼の記録に登場する皇帝はコンスタンティノーブル総大主教に欺かれた「いとも寛大なる(clementissimus)第一人者」⁽⁶⁴⁾である。そこに非難の言葉はないが、皇帝に承認されなかったマルティヌスを教皇伝に書き加えていることそのものが反皇帝であることを示している。教会にとって「皇帝の承認」は重要ではなかった。教皇ウイタリアヌス(657-672)は複数の「いとも敬虔なる第一人者」に手紙を送っている。その一人は、マルティヌスに過酷な運命を科したコンスタンス2世である⁽⁶⁵⁾。アガト(678-681)での皇帝表現も前例に準じたものである。教皇レオ2世(682-683)、ベネディクトゥス2世(684-685)の頃から「いとも敬虔にして寛大で偉大なる(magnus)第一人者」、「いとも寛大な第一人者」等⁽⁶⁶⁾、賞賛が過剰になってくる。ベネディクトゥス2世、ヨハネス5世(685-686)、コノン(686-687)では「主」が復活する⁽⁶⁷⁾。セルギウス(687-701)の代に皇帝との関係が再び緊張する。教皇がユスティニアノス2世の求めた議決の承認を拒んだからである。皇帝は教皇逮捕令を発したもののラヴェンナやペンタポリスなどの帝国領民に阻止される。ユスティニアノスは695年に一度失脚するが705年に復位し、ヨハネス7世の記録に無形容の「最高司令官」⁽⁶⁸⁾として登場する。しかし、彼が暗殺され、篡奪者フィリピコス(711-713)が皇帝になるとユスティニアノスに対する表現は好意的なものになる。コンスタンティヌス1世の記録で

は当初は「最高司令官」⁽⁶⁹⁾だったのが、「いともキリスト教的なる正統信仰の(christianissimus et orthodoxus)最高司令官」と変わり、代わって皇帝となった単意論者のフィリピコス(「異端」のレッテルを貼られている⁽⁷⁰⁾)。ユスティニアノス2世は、第6回公会議決議の「両性説」を支持している。これは教会の主張と一致する。しかし、一方で皇帝はコンスタンティノーブルにローマ教会と同等の地位を認めている。これは全教会に対する首位権を標榜するローマ教会にとって受け入れられない事である。さらに記録は「異端のフィリピコスは帝国の高官によって廃位され、正統信仰の皇帝アナスタシオス(2世)が帝権の舵を引き受けた」⁽⁷¹⁾と続く。アナスタシオスはフィリピコスの政策を覆し、カルケドン信条(両性説)を復活させ、単意論を否定し、第6回公会議の決議を再び有効とした⁽⁷²⁾。教会にとって皇帝が異端であることは、篡奪者であることよりもはるかに重要だったことがわかる。

2.3 イタリア半島におけるビザンツ皇帝の存在の希薄化

グレゴリウス2世から記述様式が大きく変わる。格段に長くなり、教皇の経歴と教会を取り巻く社会情勢の説明に多くが割かれる。グレゴリウス2世の記録では治世者名が復活する⁽⁷³⁾。グレゴリウス2世は、アナスタシオス2世(713-715)、テオドシオス3世(715-717)、レオン3世(717-741)と度重なる政権交代を経験している。この頃帝位の篡奪は常態化していた。アナスタシオスは反乱軍に担ぎ出された「正統信仰のテオドシオス」に取って代わられる。一代前のコンスタンティヌスの記録では、アナスタシオスに「正統信仰」という形容詞が付されていたが、ここではテオドシオスだけである。アナスタシオスは、コンスタンティノーブル総大主教ヨハネスをその職から解き、キュジコス司教だったゲルマヌスをその地位に据えた。ゲルマヌスはフィリピコスの賛同者だった⁽⁷⁴⁾。一方、テオドシオスに「正統信仰」という言葉が付された根拠は不明である。そのテオドシオスもレオン3世にその地位を追われる。レオン3世は戦費捻出のためにイタリアへの課税を強化し、イタリア最大の地主であるローマ教皇をはじめイタリア中の反発を招く。これに皇帝は教皇処刑命令で応じるが、ローマ人に加えスポレート公国、さらにおそらくベネヴェント公国が教皇擁護に回り、命令は阻まれる。またレオン3世は「聖画像禁止令」を発し、教会との関係を悪化させる⁽⁷⁵⁾。執筆者はこうした皇帝の態度を「皇帝の邪悪さ」(imperatoris nequitia, imperatoris malitia)⁽⁷⁶⁾と表している。グレゴリウス3世の記録には「最高司令官レオン(3世)とコンスタンティノス(5世)の治下で司教を務めた」とあるが、これは聖画像禁止を始めたのが彼らであることを説明するためである⁽⁷⁷⁾。ザカリアスの執筆者はランゴバルド王国とローマ教会の関係を十分に説明する一方、ビザンツとの関係については簡潔である。ステファヌス2世の記録は後にいくらかの改訂が加えられたとされる⁽⁷⁸⁾。記述の多くはランゴバルド族との攻防に割かれ、ビザンツ帝国が出てくるのもこれに絡んでである。教皇は帝国領を略奪したランゴバルド族との交渉に自らあたった。皇帝も教皇に特使を派遣し問題解決を委ねる。ここでは皇帝特使を通して帝国との関係が語られるだけである。ラ

ランゴバルド族の侵略はローマ教会を極めて深刻な状況に陥らせた。そのため執筆者のランゴバルド王に対する言葉には容赦がない。「王」とだけ記される場合もあるが、多くは「いとも凶悪な」(atrocissimus)、「口にするのも汚らわしい」(nefandus)、「破壊的な」(pestifer)、「いとも卑劣な」(nequissimus)⁽⁷⁹⁾等の雑言が添えられている。これに対しフランク王には「いとも卓越した」(excellentissimus)、「いともキリスト教的な」(christianissimus)、「いとも情け深い」(benignissimus)、「いともキリスト教的で情け深い」(christianissimus atque benignissimus)⁽⁸⁰⁾と、かつて皇帝に与えられていたものと言葉は異なるが同等の形容詞が付与されている。ローマ教会はキリスト教の守護者を皇帝ではなくフランク王とみなしていたのである。パウロ1世の記録には皇帝、ランゴバルド王に関する記述はない。グレゴリウス2世・3世で復活した治世者名がザカリアス、ステファヌスでは省かれていたが、ここで復活している⁽⁸¹⁾。ステファヌス3世の記録はローマ教会乗っ取り事件の顛末に終始している。ハドリアヌス1世の記録は44章を境に前後で記述スタイルが大きく異なる。前半部は歴史的出来事(772-774)の記述、後半部は教皇が行った教会の建立や修復などの事績録である。皇帝が登場するのは2か所でその表記に前例と変わるところはない。記述の多くはランゴバルド王デシデリウス(757-774)との攻防に関するものであり、登場するのはランゴバルド王とフランク王カール(768-814)である。ランゴバルド王は名前を記されるか、それに法的称号である「王」と付加されるだけである。カールにはピピンと同様の文言が添えられている⁽⁸²⁾。ザカリアス以降、皇帝への言及は急減する。これはローマにとって、皇帝や帝国の動向はそれほど関心を払うべき対象ではなくなっていたということを示している。

おわりに

教皇伝の執筆者は、皇帝がキリスト教世界の秩序の維持者であると判断できる限りは皇帝・帝国に従順である。著者が敵意を露わにするのは皇帝を信仰の「敵」とみなしたときである。ローマ教会は教皇逮捕命令を出したユスティニアノス2世を否定的に捉えていたはずである。しかし、一方でユスティニアノスは正統信仰の信奉者でもあった。コンスタンティヌス1世の作者はユスティニアノスを「いともキリスト教的なる正統信仰の最高司令官」(christianissimus et orthodoxus imperator)と称え、「単意論否定」を無効としたフィリピコスを「異端」と断罪している。ローマ教会は、皇帝が正統信仰の擁護者である限り、彼らを受け入れた。しかし、ローマ教会および教皇の異端に対する姿勢は終始一貫していたわけではない。それは折々の政治情勢によって変化した。484～519年の東西教会分裂の際には単性論支持の皇帝を拒絶する一方、政治的な動機からアリウス派の東ゴート王を受け入れている。教皇は宗教指導者であると同時にローマ教会の利益を最大化しようとする政治家でもあった。

ザカリアスの言う「社会の秩序を維持するためには、権力を持たない者よりも持つ者が王と呼ばれるのがふさわしい」の「社会」とは何を意味するのか。それは「キリスト教的価値が規範となる社会」である。「社会の秩序の維持」とは、「ローマ教会が唱えるキリスト教教義＝正

統信仰を遵奉し、擁護・保護する」ことである。「それが達成される限り、その者は統治者にふさわしい」と置き換えられる。これは『ローマ教皇伝』の執筆姿勢と一致する。皇帝が特定の集団・家系に帰属している必要はない。能力、野心、そして機会に恵まれれば、誰でもその地位に就くことは可能であった。「権力の篡奪」は批判されることではない。ローマ教会にとって篡奪者であろうと社会の秩序を維持し、必要な保護を提供する限り、その者は「皇帝」に値した。こうした考えは教皇伝の執筆者たちにも共有されていた。ザカリアスの発言は、それまでの『ローマ教皇伝』の執筆者たちが引き継いできた支配者観を十分に反映したものと考えられる。

表1.『ローマ教皇伝』の皇帝と世俗君主に付された称号と形容

教皇	在位	出身	皇帝	在位	称号と形容詞	
フェリックス3世	483-492	ローマ	ゼノン(2度目)	476-491	[LP1] [文中] imperator Zenon, Odovager rex (476-493) Odoacer rex, Theodoricus rex (493-526) [文中] imperator Zenon, Odobacer rex	
			アナスタシウス1世	491-518		
グラシウス	492-496	アフリカ	↓		[LP1] Theodoricus rex et Zenon Aug. Theodoricus rex et Zenon Aug.	
アナスタシウス2世	496-498	ローマ			Theodoricus rex	
シンマクス	498-514	サルディーニャ			[LP1] Theodoricus hereticus et Anastasius euthicianus Aug. [文中] rex Theodoricus, rex Theodoricus hereticus Theodoricus rex et Anastasius Aug. [文中] rex Theodoricus	
ホルミスダス	514-523	フロジノーネ			[LP1] [文中] rex Theodoricus, Anastasius Aug., Anastasius Aug. hereticus, imperator Iustinus orthodoxus, Iustinus imperator, Iustinus Aug. orthodoxus, Iustinus Ag., rex Francorum rex Theodoricus et Anastasius Aug. [文中] rex Theodoricus, Anastasius Augustus, imperator, imperator Anastasius, Iustinus orthodoxus, Iustinus imperator, Iustinus orthodoxus Augustus, rex Francorum Cloduvechus christianus (465-511)	
ヨハネス1世	523-526	ツクスキア(ローマ北西)	ユスティヌス(ユスティニアヌス朝)	518-527	[LP1] [文中] rex Theodoricus, Iustinus imperator, Iustinus vir religiosus, Theodoricus arrianus, Constantinus Aug., Iustinus Aug., Theodoricus rex hereticus, Iustinus Aug. orthodoxus Theodoricus rex et Iustinus Augustus christianus [文中] rex Theodoricus, Iustinus imperator orthodoxus, <u>Iustinus imperator vir religiosus</u> , hereticus rex Theodoricus, Constantinus Augustus, Iustinus Augustus, Iustinus imperator	
フェリックス4世	526-530	サムニウム(イタリア南部)	↓		[LP1] [文中] Theodoricus rex, Athalaricus rex(東ゴート 526-534)	
ボニファティウス2世	530-532	ローマ		ユスティニアヌス1世	527-565	Theodoricus rex et Iustinus Aug. Athalaricus rex hereticus et Iustinus Aug.
ヨハネス2世	533-535	ローマ				Athalaricus rex et Iustinianus Aug. [文中] vir religiosus Augustus, christianissimus imperator Iustinianus Aug.
アガビトゥス	535-536	ローマ				[文中] domnus Iustinianus Augustus, imperator domnus Iustinianus Augustus, Theodatus rex (東ゴート 534-536), regina Amalasuenta (東ゴート 534), Theodoricus rex, piissimus princeps imperator, domnus Iustinianus Augustus, Augustus, imperator, Iustinianus imperator christianissimus, piissimus Augustus Iustinianus
シルウェリウス	536-537	カムパーニャ			[文中] tyrannus Theodatus, domnus imperator Iustinianus Augustus, domnus Iustinianus Augustus, Witigis rex (東ゴート王 536-540)	

ウイギリウス	537-555	ローマ	↓		[文中] Witigis rex Gothorum, Iustinianus imperator, imperator		
ペラギウス1世	556-561	ローマ					
ヨハネス3世	561-574	ローマ		ユスティヌス2世	565-578	[文中] Iustinianus (=Iustinus 2世), piissimus princeps, imperator	
ベネディクトゥス1世	575-579	ローマ				[文中] Iustinianus piissimus imperator	
ペラギウス2世	579-590	ローマ		ティベリウス2世	578-582	[文中] princeps	
グレゴリウス1世	590-604	ローマ		マウリキウス	582-602		
サヴィニアヌス	604-606	ツウスキア		フォーカス	602-610		
ボニファティウス3世	607	ローマ				[文中] Focas princeps	
ボニファティウス4世	608-615	ヴァレリア (イタリア)		↓	ヘラクレイオス (ヘラクレイオス朝)	610-641	[文中] Focas princeps
デウスデイト	615-618	ローマ					
ボニファティウス5世	619-625	ナポリ					[文中] princeps, piissimus princeps
ホノリウス	625-638	カムパー ニヤ					[文中] piissimus Heraclius imperator
セウェリヌス	640	ローマ					[文中] domnus imperator, christianissimi imperatores, Heraclius imperator
ヨハネス4世	640-642	ダルマティア	コンスタンティノス3世		641.2-641.5		
			ヘラクロナス(共同皇帝)	641.2-641.9			
			コンスタンス2世	641.9-668			
テオドルス	642-649	ギリシャ			[文中] imperator		
マルティヌス1世	649-653	ツウスキア			[文中] clementissimus princeps, imperator		
エウゲニウス	654-657	ローマ					
ウイタリアヌス	657-672	カムパー ニヤ	コンスタンティノス4世	668-685	[文中] piissimi principes, Constantinus (=Constans 2世) Augustus		
アデオダトゥス	672-676	ローマ					
ドヌス	676-678	ローマ					
アガト	678-681	シチリア			[文中] piissimi principes Constantinus, Heraclius et Thiberius Augusti, princeps, pius princeps, piissimus et serenissimus princeps, piissimi imperatores		
レオ2世	682-683	シチリア			[文中] piissimus et clementissimus magnus princeps Constantinus, clementissimus princeps		
ベネディクトゥス2世	684-685	ローマ			[文中] clementissimus Constantinus magnus princeps, domnus Iustinianus et Heraclius filiorum clementissimi principis		
ヨハネス5世	685-686	シチリア	ユスティニアヌス2世	685-695	[文中] clementissimus princeps, domnus Iustinianus Augustus		
コノン	686-687	—			[文中] domnus Iustinianus princeps, domnus Constantinus		
セルギウス1世	687-701	シリア	レオンティオス	695-698	[文中] Iustinianus imperator, Iustinianus Augustus, imperator		
ヨハネス6世	701-705	ギリシャ	ティベリオス3世	698-705.8			
ヨハネス7世	705-707	ギリシャ	ユスティニアヌス2世(2度目)	705.8-711	[文中] Aripertus rex Langobardorum (653-661), Iustinianus imperator		
シシニウス	708.1.15-2.4	シリア					
コンスタンティヌス1世	708-715	シリア	↓				
			フィリピコス	711-713	[文中] Iustinianus imperator, imperator, Tiberius imperator, Iustinianus Augustus, domnus Iustinianus imperator, Augustus christianissimus, princeps, Iustinianus christianissimus et orthodoxus imperator, Philippicus hereticus, hereticus imperator, Anastasius orthodoxus Augustus, Anastasius princeps		
			アナスタシオス2世	713-715			
グレゴリウス2世	715-731	ローマ	テオドシオス3世	715-717	Anastasius, Theodosius, Leon atque Constantinus Augusti [文中] Iustinianus princeps, Liutprandus rex (Langobardorum 712-744), Aripertus rex, Anastasius imperator, Theodosius orthodoxus imperator, Theodosius imperator, Philippicus nec dicendus, rex Langobardorum Liutprandus, imperator, Lombardorum rex		
			レオーン3世 (イサウリア朝)	717-741			

グレゴリウス3世	731-741	シリア	↓ コンスタンティノス5世 ↓ レオーン4世 ↓ コンスタンティノス6世		[文中] Leon et Constantinus imperatores, principes Leon et Constantinus, nefandi Langobardi et rex eorum Liutprandus, Carolus sagacissimus vir rex Francorum
ザカリアス	741-752	ギリシャ		741-775	[文中] Liutprandus Langobardorum rex, imperator, rex Langobardorum, Liutprandus rex, serenissimus Constantinus princeps, Constantinus princeps, Carolus (Carolus Martel 宮宰714-741) Francorum rex, Ratchis Langobardorum rex (744-749), Ratchis rex
ステファヌス2世	752-757	ローマ			[文中] Langobardorum rex Aistulfus (749-756), protervus Langobardorum rex, rex impius (Aistulfus), nequissimus Aistulfus, atrocissimus Langobardorum rex, nefandus rex Langobardorum, pestifer Langobardorum rex, Carolus (Carolus Martel) excellentissime memorie rex Francorum, Pippinus rex Francorum, Francorum rex, Langobardorum rex, iniquus Langobardorum rex, blasphemus rex (Aistulfus), Aistulfus nequissimus rex, nefandus rex (Aistulfus), malignus Langobardorum rex, Pippinus excellentissimus Francorum rex, christianissimus rex (Pippinus), christianissimus Pippinus, christianissimus Pippinus rex, Pippinus rex, nefandissimus Aistulfus, benignissimus Pippinus rex, nec dicendus Aistulfus tyrannus, christianissimus Pippinus rex Francorum, Aistulfus nequissimus Langobardorum rex, eximius Francorum rex, atrocissimus Aistulfus, sevisimus Aistulfus Langobardorum rex, benignissimus Francorum rex, excellentissimus Pippinus rex, protervus Aistulfus, infidelis Aistulfus Langobardorum rex, inimicus Aistulfus, tyrannus Aistulfus, christianissimus et Dei cultor Pippinus Francorum rex, Francorum christianissimus rex, christianissimus atque benignissimus Pippinus Francorum rex, benignissimus Pippinus Francorum rex, Aistulfus atrocissimus rex Langobardorum, infelix Aistulfus, Desiderius rex (Langobardorum 757-774)
パウロ1世	757-767	ローマ			[文中] Constantinus(5世) et Leon (4世) imperatores, Constantinus et Leon Augusti
ステファヌス3世	768-772	シチリア			[文中] Desiderius rex Langobardorum, Langobardorum rex, <u>excellentissimi viri Pippinus, Carolus(768-814) et Carolomannus(768-771), reges Francorum et Patricii Romanorum</u> , christianissimus Pippinus rex, Carolus et Carolomannus reges Francorum et patricii Romanorum, christianissimi reges, excellentissimus Carolus rex Francorum et patricius Romanorum, protervus Desiderius rex, Desiderius rex
ハドリアヌス1世	772-795	ローマ		775-780	[文中] Desiderius Langobardorum rex, Desiderius rex, Carolomannus rex Francorum, Pippinus rex et eius filii Carolus et Carolomannus excellentissimi reges Francorum et patricii Romanorum, atrocissimus Desiderius, protervus Desiderius, rex Langobardorum, excellentissimus Carolus rex Francorum et patricius Romanorum, Constantinus et Leon augusti magnisque imperatores, excellentissimus Carolus a Deo protectus rex Francorum et patricius Romanorum, malignus Desiderius, christianissimus Carolus magnus rex, protervus rex (Desiderius), excellentissimus Francorum rex, perfidus Langobardorum rex, excellentissimus et a Deo protectus Calulus magnus rex, revera christianissimus Carolus Francorum rex, christianissimus rex (Carolus), a Deo protectus Carolus magnus rex, christianissimus Francorum rex, protervus Desiderius rex, christianissimus Carolus Francorum rex, benignissimus Carolus rex, Francorum rex, a Deo institutus benignissimus Carolus magnus Francorum rex et patricius Romanorum, excellentissimus ac benignissimus Carolus rex, christianissimus Carolus rex, excellentissimus rex (Carolus), benignissimus rex (Carolus), praecellentissimus Carolus, praecellentissimus et revera christianissimus Carolus Francorum rex, excellentissimus Carolus Francorum rex
			780-797		

*形容を伴わない rex と人名は取り上げていない。複数の形容を伴うものは語順が異なっても語彙が同じ場合は同一のものとして扱っている。

** Odovager, Odoacer, Odobacer は原文ママ。Carolus, Carulus, tyrannus, tirannus, domnus も同様。

*** 下線部は一つながりの語句。

出典: *Liber Pontificalis*, ed. L. Duchesne, *Le Liber Pontificalis. Texte, introduction et commentaire*, 2 vols (Paris, 1886-1892), repr. 1955より作成。

註

- (1) ピピンのザカリアスへのこの問い合わせは、フランク史料である『偽フレデガリウス年代記続編』(*Fredegarii Chronicorum Liber Quartus cum Continuationibus: The Fourth Book of the Chronicle of Fredegar with its Continuations*, ed. and trans. J. M. Wallace-Hadrill, London, 1960, Continuations c. 33, p. 102), 『王国年代記』(*Annales Regni Francorum*, ed. F. Kurze, MGH SRG, VI, Hanover, 1895, s.a. 749, p. 8), 『ピピンの塗油について』(*Clausula de unctione Pippini*, ed. B. Krusch, MGH SRM, I, Hanover, 1885, pp.465-466; trans. Brian Pullan, *Sources for the History of Medieval Europe from the Mid-Eighth to the Mid-Thirteenth Century*, Oxford, 1966, pp. 7-8)にのみ見られることからこの出来事を後世の創作ではないかとする研究者も存在する(Rosamond McKitterick, ‘The Illusion of Royal Power in the Carolingian Annals’, *The English Historical Review*, Vol.115, No. 460, Oxford, 2000, pp.1-20, ‘Constructing the Past in the Early Middle Ages: The Case of the Royal Frankish Annales’, *Transactions of the Royal Historical Society*, Vol. 7, Cambridge, 1997, pp. 101-129 and *History and Memory in the Carolingian World*, Cambridge, 2004, pp. 133-145);マツキタリクの主張に言及しているのは, Thomas F. X. Noble, ‘Rosammond Mckitterick has looked carefully at all the surviving evidence for this exchange and has come to the conclusion that it was a later invention. Although one may disagree with McKitterick’s readings of the evidence, her arguments are forceful and intriguing.’ (*Charlemagne and Louis the Pious*, trns. T. F. X. Noble, Pennsylvania, 2009, pp.1-2). 本稿では従来受け入れられている説にそって議論を進める。
- (2) *Liber Pontificalis*, ed. L. Duchesne, *Le Liber Pontificalis. Texte, introduction et commentaire*, 2 vols, Paris, 1886-1892, repr. 1955 (以後 LP と表記), pp. 373-374_VII-VIII; English translation Raymond Davis, *The Book of Pontiffs (Liber Pontificalis) : The ancient biographies of the first ninety Roman bishops to AD 715*(以後, 翻訳部分を trans. Davis, オリジナル部分を *Book of Pontiffs* と表記), third ed. Liverpool, 2010, pp. 82-83.
- (3) LP, p. 383_I-II; trans. Davis, p.85.
- (4) 註 2 参照; English translation Raymond Davis, *The Lives of the Eighth-Century Popes (Liber Pontificalis)*, second ed. Liverpool, 2007 (以後, *The Lives* と表記).
- (5) ペトロの時代に「教皇」という地位は存在せず, 概念そのものも存在していなかった。ペトロを「初代ローマ司教」とみなすようになったのは教皇カリストゥス 1 世 (Callistus, 217-222) の頃からである(Geoffrey Barraclough, *The Medieval Papacy*, New York, 1968, pp.10 and 14).
- (6) Louis Duchesne, *Etude sur le Liber Pontificalis*, Paris, 1877, pp. 24-28, LP, pp. XXXIII-XLVIII, Rosamond McKitterick, ‘Roman texts and Roman history in the early Middle Ages’, ed. C. Bolgia, R. McKitterick and J. Osborne, *Rome Across Time and Space: Cultural Transmission and the Exchange of Ideas, c.500-1400*, Cambridge, 2011, pp. 19-34 at note 3(以後 Roman Texts and Roman History と表記).
- (7) Herman Geertman, ‘Documenti, redattori e la formazione del testo del *Liber pontificalis*’, ed. H. Geertman, *Il Liber pontificalis e la storia materiale, Mededelingen van het Nederlands Instituut te Rome* 60-1, Assen, 2003, pp. 267-284 (以後 Documenti と表記), repr. in H. Geertman, *Hic fecit basilicam. Studi sul Liber pontificalis e gli edifici ecclesiastici di Roma da Silvestro a Silverio*, Leuven-Paris-Dudley, 2004, pp.149-168 (以後 *Hic fecit basilicam* と表記) and ‘La genesi del *Liber pontificalis* romano : un processo di organizzazione della memoria’, ed. F. Bougard and M. Sot, *Liber, Gesta, histoire: Écrire l’histoire des évêques et des papes, de l’Antiquité au XXI^e siècle*, Turnhout, 2009, pp. 37-108 (以後 La genesi と表記).
- (8) McKitterick, op. cit., p 19.
- (9) Davis, *Book of Pontiffs*, pp. xiii, xlv and xlvi; McKitterick, ‘The Papacy and Byzantium in the Seventh- and early Eighth-Century Sections of the *Liber Pontificalis*’, *Papers of the British School of Rome* 84, 2016, pp. 241-273 at 247 (以後 The Papacy と表記).
- (10) McKitterick, ‘The Papacy’, p. 248 and note 22: Davis, *Book of Pontiffs*, p. xvii.
- (11) Davis, *Book of Pontiffs*, p. xvii.
- (12) LP には初版(以後 LP¹ と表記)と第 2 版, それに第 2 版に書き足された続編が収録されている。本稿で LP として扱うのは第 2 版と続編。

- (13) Davis, *Book of Pontiffs*, p. xiii.
- (14) Davis, *Book of Pontiffs*, pp. xviii and xxiii.
- (15) Duchesne, *op. cit.*, pp. 205-209 and *LP*, p. CLXII.
- (16) Geertman, 'Documenti', 'La genesi' and *More Veterum. Il 'Liber Pontificalis' e gli edifici ecclesiastici di Roma nella tarda antichità e nell'alto medioevo*, Groningen, 1975, p. 34(以後 *More Veterum* と表記).
- (17) Thomas F. X. Noble, 'A new look at the *Liber pontificalis*', *Archivum Historiae Pontificiae* vol. 23, 1985, pp. 347-358.
- (18) Davis, *Book of Pontiffs*, pp. xiv-xvi.
- (19) McKitterick, 'The Papacy', p. 245 and Davis, *The Lives*, pp. 84 and 106.
- (20) *LP*, pp. 258 and 290; trans. Davis, pp. 42 and 52.
- (21) Giovanni Battista de Rossi, *La Roma sotterranea Cristiana*, 3 vols, Rome, 1864-1877, Duchesne, *op. cit.* and *LP*, pp. i-cclxii and Theodor Mommsen, 'Prolegomena', in MGH *Gesta pontificum Romanorum* 1.1: *Liber Pontificalis*, pars prior, Berlin, 1898.
- (22) Duchesne, *op. cit.*
- (23) McKitterick, 'La place du *Liber pontificalis* dans les genres historiographiques du haut Moyen Âge', ed. F. Bougard and M. Sot, *Liber, Gesta, histoire : Écrire l'histoire des évêques et des papes, de l'Antiquité au XXI^e siècle*, Turnhout, 2009, pp. 23-35(以後 La place と表記); 'Roman texts and Roman history'; 'Narrative strategies in the *Liber Pontificalis*: the case of *St. Paul, doctor mundi, doctor gentium, and San Paolo fuori le mura*', *Rivista di storia cristianesimo* 10, 2013, pp. 115-130; 'The representation of Old Saint Peter's basilica in the *Liber Pontificalis*', ed. R. McKitterick, J. Osborne, C. M. Richardson and J. Story, *Old Saint Peter's Rome*, 2013, pp.95-118; The Papacy; 'The popes as Rulers of Rome in the Aftermath of Empire, 476-769', ed. S. J. Brown, C. Methuen and A. Spicer, *Studies in Church History* 54, Cambridge, 2018, pp.71-95 (以後 The Popes as Rulers と表記); 'The Constantinian basilica in the early medieval *Liber Pontificalis*', ed. L. Bosman, I. Haynes and P. Liverani, *The basilica of Saint John Lateran to 1600*, Cambridge, 2020, pp. 197-220 (刊行間がなく本稿脱稿までに入手することができなかつた); *Rome and the Invention of the Papacy (The Liber Pontificalis)*(以後 *Rome and the Invention* と表記), Cambridge, 2020 (マッキタリクにはこのほか複数の研究があるが、ここでは特に『ローマ教皇伝』に関わるものを列挙した。また、'The *Liber Pontificalis* and the transformation of Rome from pagan to Christian city in the early middle ages', ed. J. Stenger et al., *Being Pagan, Being Christian in the Late Antiquity and Early Middle Ages*, London が刊行まじかとの情報を得た), Herman Geertman, *More veterum*; 'Documenti'; 'Le biografie del *Liber pontificalis* dal 311 al 535: testo e commentario', *Hic fecit basilicam*, pp. 169-235 and 'La genesi', Lidia Capo, *Il Liber Pontificalis, i Longobardi e la nascita del dominio territoriale della chiesa romana*, Spoleto, 2009 and Clemens Gantner, 'The Lombard recension of the Roman *Liber pontificalis*', *Rivista di storia del cristianesimo* 10, 2013, pp. 65-114 and 'The eighth-century papacy as cultural broker', ed. C. Gantner, R. McKitterick and S. Meeder, *The resources of the Past in Early Medieval Europe*, 2015, Cambridge, pp. 245-261. 『ローマ教皇伝』に関する個別研究は膨大であるが、ここでは Andrea A. Verardi, 'La genesi del *Liber Pontificalis* alla luce delle vicende della città di Roma tra la fine del V e gli inizi del VI secolo : una proposta', *Rivista di storia del cristianesimo* 10, 2013, pp.7-28 and *La memoria legittimante: il Liber Pontificalis e la chiesa di Roma del secolo VI*, Roma, 2016, Philippe Blaudeau, 'Narrating Papal Authority (440-530): The Adaptation of *Liber Pontificalis* to the Apostolic See's Developing Claims', ed. G. D. Dunn, *The Bishop of Rome in Late Antiquity*, Farnham/ Burlington, 2015, François Bougard, 'Composition, diffusion et réception des parties tardives du *Liber pontificalis* romain (VIII^e-IX^e siècles)', ed. F. Bougard and M. Sot, *Liber gesta, histoire : Écrire l'histoire des évêques et des papes, de l'Antiquité au XXI^e siècle*, Turnhout, 2009, pp. 127-152 and Noble, *op. cit.* を挙げておく。
- (24) McKitterick, 'The Papacy'.
- (25) Eadem, 'La place'.
- (26) Eadem, 'The Popes as Rulers'.
- (27) Eadem, *Roma and the Invention*.
- (28) 註7 参照。
- (29) Blaudeau, *op. cit.*

- (30) *LP*, pp. XLIII-XLIV, シンマクスとラウレンティウスの争いに関する研究として、E. Wirbelauer, *Zwei Päpste in Rom. Der Konflikt zwischen Laurentius und Symmachus (498-514)*, München, 1993, T. Sardella, *Società chiesa e Stato nell'età di Teoderico. Papa Simmaco e lo scisma laurenziano*, Soveria Mannelli, 1996, 田畑賀世子「東ゴート支配下のイタリアにおけるローマ教会と元老院貴族の関係の一側面——教皇シュンマクス（四九八年から五一四年）とラウレンティウスのシスマをめぐる——」『西洋史学』200, 2000年, 26-45頁を挙げておく。
- (31) *LP*, pp. XXXIX -XLI and XLVIII, Duchesne, *op. cit.*, p. 211.
- (32) Blaudeau, *op. cit.*, pp. 127-140 at 130 and 133.
- (33) J. B. Bury, *A History of the Later Roman Empire from Arcadius to Irene (395 A. D. to 800 A. D.)*, vol. 2, New York, First Published 1889, repr. 2018, A. H. M. Jones, *The Later Roman Empire, 284-602; A Social Economic and Administrative Survey*, 3 vols., Oxford, 1964, Georg Ostrogorsky, *History of the Byzantine State*, trans. Joan Hussey, rev. ed., New Brunswick, 1969 and *The New Cambridge Medieval History I c. 500 - c. 700*, ed. Paul Fouracre, Cambridge, 2005 を挙げておく。
- (34) John F. Haldon, 'The imperial church and the politics of authority' in *Byzantium in the Seventh Century*, Cambridge, 1990, pp. 281- 323 and *the empire that would not die: the Paradox of Eastern Roman Survival, 640-740*, Harvard University Press, 2016 and Andrew J. Ekonomou, *Byzantine Rome and the Greek Popes: Eastern Influences on Rome and the Papacy from Gregory the Great to Zacharius, A. D. 590-752*, 2007, Lanham, MD.
- (35) ただし、マッキタリクは統治者記載について次のように述べている; “These(dating clauses) too can be regarded as a simple means of adding some chronological precision rather than offering statements about political affiliations or sympathies. It may be significant that it is only during the Ostrogothic period that the secular rulers are particularly acknowledged.” in ‘The Popes as Rulers’, pp. 79-80.
- (36) H. I. マルー『キリスト教史 2 教父時代』上智大学 中世思想研究所 編訳/監修 平凡社, 1996, 268-270頁。
- (37) *LP*, p. 260_I. *Imperator, Augustus, princeps* はすべて皇帝を意味するが、本稿では *LP* にどの言葉が使用されているかを明示するためそれぞれ「最高司令官」、「皇帝」、「第一人者」という訳を当てる。「*imperator*」は「支配権・命令権」(*imperium*)保持者、「ローマ軍団の最高司令官」、「統治者・支配者」である。「*Augustus*」は「上位の権威」(*auctoritas*)を持つ「最高権威者」を意味し、元老院がオクタウィアヌスにこの称号を授けて以来、皇帝の「添え名」となり、この一語で皇帝を指すようになった。「*princeps*」は「元老院の第一人者」、「市民の第一人者」に由来し、政治体制の最高権力者である皇帝を意味する言葉として定着した。「皇帝」、「最高司令官」、「第一人者」の使い分けは明瞭ではない: Gerhard Rösch, *Onoma Basileias Studien zum offiziellen Gebrauch der Kaisertitel in spätantiker und frühbyzantinischer Zeit*, Verlag OAW, 1978, pp. 33-40, ベルナルド・レミィ『ディオクレティアヌスと四帝統治』大清水裕訳, 白水社, 2010年, 52-56頁 (原書名: *Dioclétien et la tétrarchie*. Paris: Presses Universitaires de France, 1998).
- (38) エウテュケス(Eutyches c.375-c.454)は、人性は神性に融合され単一の性になった(単性論)と主張した。
- (39) *LP*¹, p. 97.
- (40) *LP*¹, p. 101.
- (41) *LP*¹, p. 105.
- (42) Patrick Amory, *People and identity in Ostrogothic Italy, 489-554*, Cambridge, 1997, pp. 205 and 214-215.
- (43) *Ibid.*, p. 218.
- (44) *LP*, p. 281_I.
- (45) J. N. D. Kelly, *The Oxford Dictionary of Popes*, Oxford, 1986, p. 58.
- (46) Amory, *op. cit.*, p. 224.
- (47) *Ibid.*, p.225.
- (48) *LP*, pp. 287-288_II-V.
- (49) *LP*, p. 238.

- (50) ペトロの記録では皇帝は「Augustus」ではなく「Caesar」が用いられている : *LP*, p. 118.
- (51) Amory, *op. cit.*, p. 225.
- (52) テオドリックの娘であるアマラスエンタは、息子アタラリックの早世により女王となるが、女性君主に否定的な勢力を懐柔するために従弟のテオダトゥスを共同統治者とする。
- (53) *LP*, pp. 287_II.
- (54) *LP*, p. 290_II.
- (55) *LP*, p. 290_II-III.
- (56) ベルナーール・レミイ, 前掲書, 54 頁.
- (57) *LP*, p. 305_III.
- (58) *LP*, p. 308_I; trans. Davis, p. 59.
- (59) J. B. Bury, *op. cit.*, p.154.
- (60) *LP*, p. 316_I; trans. Davis, p. 60.
- (61) *LP*, p. 321_II.
- (62) *LP*, p. 323_II.
- (63) J. N. D. Kelly, *op. cit.*, pp. 73-74.
- (64) *LP*, p. 336_I.
- (65) *LP*, p. 343_I-III; trans. Davis, pp. 69-70.
- (66) *LP*, pp. 359_II, 360_IV and 363_III.
- (67) *LP*, pp. 363_III, 366_III and 368_III.
- (68) *LP*, p. 385_IV.
- (69) *LP*, p. 389_III.
- (70) *LP*, p. 391_VIII; trans. Davis, p. 89.
- (71) *LP*, p. 392_X-XI; trans. Davis, pp. 89-90.
- (72) Haldon, *Byzantium in the Seventh Century*, p. 80.
- (73) *LP*, p. 396_I.
- (74) J. B. Bury, *op. cit.*, pp. 370-371.
- (75) Noble, *The Republic of St. Peter: The Birth of the Papal State 680-825*, Philadelphia, 2nd. 1991, pp. 28-29.
- (76) *LP*, pp. 404-405_XVII and 409_XXIII.
- (77) *LP*, p. 415_II.
- (78) Davis, *The Lives*, p. 50.
- (79) *LP*, pp. 442_VIII and_X, 443_XI, 444_XV, 446_XXI, 447_XXIV, 448-449_XXX-XXXII and 454_XLVIII etc.
- (80) *LP*, pp. 447_XXIV, _XXVI, 448_XXVII and XXX, 449_XXXI, 450_XXXVI, _XXXVII, 452_XLII-XLIV, 453_XLV and 454_XLVI etc.
- (81) *LP*, p. 463_II.
- (82) *LP*, pp. 488_IX, 494_XXVI, 495_XXIX and 496_XXXIV etc.